



警告のニュースレター「角笛」

発行日:2015年5月発行(第61号)

発行:警告の角笛出版

価格:フリーペーパー

角笛 HP:<http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

【目次】

- ◎巻頭メッセージ:「さばきが神の家から始まる」 エレミヤ
- ◎証:「御霊の実」を結ぶ E3
- ◎お知らせコーナー:「新刊本の紹介」「日曜礼拝&HPのご案内」

[巻頭メッセージ]

「裁きが神の家から始まる」

by エレミヤ

今回は、「裁きが神の家から始まる」として、この件をメッセージしていきたいと思います。テキストは以下の箇所です。

〔聖書箇所〕I ペテロの手紙4:17,18

4:17 なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう。

4:18 義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。

この箇所に沿って考えてみましょう。

<さばきとは?>

テキストの箇所では「さばき」が神の家から始まる時が来ていることが語られています。さ

て、この「さばき」とは、そもそもどういう意味合いのことばなのでしょうか?このことばは、ギリシャ語で、“krima”という原語が使われています。この同じ原語は、以下の聖書箇所でも使われています。

〔聖書箇所〕マタイの福音書23:14

23:14 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、やもめたちの家を食いつぶしていながら、見えのために長い祈りをするからです。ですから、あなたがたは、人一倍ひどい罰を受けます。

ここで、「罰」と訳されていることばが同じ原語なのです。

〔聖書箇所〕ルカの福音書23:40

23:40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。

ここで、「刑罰」と訳されていることばが同じ原語なのです。ですから、テキストが語っていること、言わんとしていることの主旨は、「神の家である教会に罰や刑罰の日が来るぞ」との

さばきが神の家から始まる エレミヤ

警告なのです。

<今の時代の教師は盲目となっている>

ですので、私たちはこのことばから、はっきりと理解しなければなりません。

それは、終末の日に必ず、教会にさばきや刑罰の日が来ることを聖書は語っている、ということなのです。残念ながら、今の教師たちは盲目であり、クリスチャンにとって耳障りの良いことしかメッセージで語られていません。それで教会は、終末の日には栄光のうちに天に挙げられ、艱難にもさばきにも会わないとの教えが語られています。しかし、それは聖書のことばに沿わない間違えたものであり、勘違いなのです。主はかつて勘違いをしているカペナウムの人々に以下のように語られました。

[聖書箇所]マタイの福音書11:23,24

11:23 カペナウム。どうしておまえが天に上げられることができよう。ハデスに落とされるのだ。おまえの中でなされた力あるわざが、もしもソドムでなされたのだったら、ソドムはきょうまで残っていたことだろう。

11:24 しかし、そのソドムの地のほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえよりは罰が軽いのだ。」

自分たちは正しい者と思い込んでおり、自分たちは義に満ちており、天に上げられるにふさわしい者である、と思い込んでいるカペナウムの人々に対して、主は彼らの真の姿に関して語りました。彼らの不義はソドム、ゴモラを超えるものであり、天に上げられるどころか、ハデスに落とされるにふさわしいものであることを語ったのです。そして、この主のことばは現在の教会にそのまま当てはまるものかもしれません。今の教会が人々の目にどう見えているのかは知りませんが、しかし神の目には天に上げられるというより、ハデスに落とされるにふさわしいものとなっているのです。そしてそうであるからこそ、終末の日に教会に対してさばきが下され、罰が下される日が来るのです。罰は意味無くは下されません。

刑務所で罰を受ける人は、皆理由があって罰を受けています。人のものを盗んだり、人に傷害を加えたり、何しろ悪いことをして、それぞれ相応の罰を受けているのです。教会も例外ではありません。神は意味無く、終末の日に教会に罰を下すのではなく、そこに至るいきさつがあり、理由があるのです。このことを知らなければなりません。

<教会は墮落し、罪に陥り、神の罰を受けるようになる>

繰り返しますが、テキストの聖句は、明らかに神の家である教会に対して神がさばきを下し、罰を下すようになる日が来ることを暗示します。その理由は何でしょう？私の理解では、教会の背教のゆえです。終末の日に教会が背教することは以下で明言されています。

[聖書箇所]Ⅱテサロニケ人への手紙2:3

2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

この箇所では、教会に背教が起こり、その結果、滅びの子、すなわち反キリストさえ、教会が受入れるようになることが描かれています。そうです、終末の日に教会は背教し、キリストを裏切るようになるのです。このことがテキストに書かれている終末の日の神の家、教会へのさばき、刑罰の日と大いに関係していると思われます。

<裁きの時という特別な時>

上記テキストには、「**さばきが神の家から始まる時が来ているからです。**」(the time is come)と書かれています。その教会のさばきの時と関連して、聖書は“the time”として、ある特定の一つの時に関して語っていることを理解しましょう。このことばは教会時代の終わり、新約の神の民の背教がきわまったある特定の時代に関して語り、預言しているのです。例として、たとえば主の初降臨の時も特殊な時でした。

さばきが神の家から始まる エレミヤ

それは、アブラハム、ダビデと続いてきた旧約の神の民の歴史のクライマックス、もしくは背教のきわみとでも言える時、時代だったので。その時代の彼らは、かつての時代に旧約の神の民イスラエルが決して起こさなかった大きな罪、すなわちメシヤ殺しを行ったのです。このことは、アブラハムの時代にもダビデの時代にも起きなかった大きな罪であり、いわば背教のきわみでした。そして、その大きな罪のゆえに、主イエスの初降臨の時代の人々は厳しいさばき、罰を神から受けました。キリストを殺したエルサレムの都はローマにより包囲され、最後の一人まで殺されたのです。大きなさばき、罰が神の民に下ったのです。そして聖書が暗示していることは、この主イエスの初降臨の時のさばきと同じような厳しいさばきがこれから教会に来ようとしている、ということです。

<義人がかろうじて救われる>

4:18 義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、いったいどうなるのでしょうか。

さて、その来るべき教会への裁きの時と関連して、その日には義人がかろうじて救われる、ことが語られています。

いったいその日はどのような日なのでしょう？それを考えてみたいのです。義人がかろうじて救われる日に関しては、以下に書かれています。

[聖書箇所] II ペテロの手紙2:5-8

2:5 また、昔の世界を救さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。

2:6 また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。

2:7 また、無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出されました。

2:8 というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。”

ここには洪水を逃れて義を宣べ伝えたノアた

ち、さらにソドム、ゴモラのさばきを逃れた義人ロトについて書かれています。彼らこそ、これらのさばきをかろうじて逃れた義人なのです。この箇所からテキストの「**義人がかろうじて救われる神の家の裁きの日**」に関して、少し理解が与えられるように思えます。これらのことを通して以下のことが分かります。

①そのさばきの日に背教の教会に下るさばきは厳しいものとなる。それはノアの時の洪水のように、また、ロトの時のソドム、ゴモラへの火のさばきのように厳しいものとなる。その日、さばきの中で滅ぼされたり、永遠の命を失う人が多い。

②その日、ノアやロトのように、少数の義人がその教会へのさばきを経て永遠の命を永らえる。

このように、私たちの思惑や予想と反して、教会の裁きと関連して、非常に厳しい日を聖書は暗示していることが分かるのです。

<義を宣べ伝える>

私たちがこれから来る教会へのさばきの時を経て、なおかつ永遠の命を得るためにはどうすれば良いのでしょうか？上記ノアに関することがヒントとなるように思えます。

「義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し」

ここでは、洪水のさばきの時を経てなおかつ命を永らえたノアたちに関連して、彼らが、「**義を宣べ伝えた**」ことが描かれています。ですので、もし、私たちがこれから来る教会へのさばきの時を経て、なおかつ永遠の命を獲得するつもりなら、「**義を宣べ伝える**」ことに目を留めるべきことが分かります。「**義を宣べ伝える**」とは、具体的にはどういうことでしょうか？ノアの時代に関しては、以下のように書かれています。

[聖書箇所]創世記6:7-12

6:7 そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」

さばきが神の家から始まる エレミヤ

6:8 しかし、ノアは、主の心にならなかった。

6:9 これはノアの歴史である。ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

6:10 ノアは三人の息子、セム、ハム、ヤペテを生んだ。

6:11 地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。

6:12 神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。

ノアの時代はこのように墮落し、道を乱した時代でした。しかしノアたちは、その時代にあっても正しくとどまり、また義を宣べ伝えたのです。具体的には、この時代に神の裁きが来ること、洪水により滅ぼされる日が来ることを警告し、正しい道に立ち戻るべきことを人々に語り続けたのです。そしてこのこと、ノアたちが義を宣べ伝えたことは結果として、彼ら自身の命を救うことになったのです。

<主イエスも義を宣べ伝えた>

主イエスもその時代にあって、義を宣べ伝えました。主は偽善の律法学者、パリサイ人たちに対して警告を与えることに躊躇しませんでした。彼らがゲヘナに入ること、この時代に神のさばきが来ること、すなわち神の義を宣べ伝えたのです。以下の通りです。

[聖書箇所]マタイの福音書23:33-36

23:33 おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。

23:34 だから、わたしが預言者、知者、律法学者たちを遣わすと、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して行くのです。

23:35 それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復があなたがたの上に来るためです。

23:36 まことに、あなたがたに告げます。これらの報いはみな、この時代の上に来ます。

このように、主は偽善である律法学者やパリサイ人に対して神の義を語りました。彼らに来ようとしている神のさばきははっきりと警告したのです。また、この時代に来るさばきについても語りました。

これらの主の警告は意味の無いものではなく、のちに災いは主の言われた通り、彼らに臨みました。事実、この後、神のさばきは断行され、エルサレムはローマにより滅ぼされてしまったからです。

<終末の日にも義を宣べ伝えることが大事>

さて、これらの義を宣べ伝えた人々のことは、終末の日に関する型と思えます。終末の日においても義を宣べ伝え、来たらんとする神のさばきに関して警告を行うことが大事であると理解できます。ですので、終末の日において大事なことは、決して人々にとって耳障りの良い終末の空想話を語ることはありません。艱難の前に挙げられるとか、教会にさばきは来ないなどの空想話を語ることではないのです。そうではなくて、来るべき教会の背教に関して警告し、また、来るべき神の家、教会への神のさばきに対して警告を与えることが大事なのです。

<正しいクリスチャンはその日困難に会う>

さて、ソドムに住みながら、命を永らえた義人ロト、すなわち「かろうじて救われた義人」に関して聖書はこう語ります。

「というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。」

彼、義人ロトは、同性愛の町ソドムに住みながら、彼らに同調せず、その罪に心を痛めていたのです。このことは、終末の日においても大事なポイントになるかもしれません。なぜなら、終末の日に墮落した教会は、「ソドムやエジプトと呼ばれる都」となるからです。以下のことばの通りです。

さばきが神の家から始まる エレミヤ

〔聖書箇所〕ヨハネの黙示録11:8

11:8 彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。

教会はその日、同性愛を受入れ、神の前にはソドムのように見なされるようになるでしょう。我々にとり、その日大事なことは、そのような墮落した教会に妥協せず、あくまでロトのように義人として留まることです。なぜなら、義人がかろうじて救われるのだからです。

しかし、その日、正しく留まろうとするクリスチャンに関して困難が来ることを聖書は暗示します。なぜなら、今回のテキストの箇所の前後には以下のように苦難を暗示することばが書かれているからです。

〔聖書箇所〕I ペテロの手紙4:16,19

4:16 しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、この名のゆえに神をあがめなさい。

4:19 ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せなさい。

これらのことばには、正しいクリスチャンがキリスト者として苦しみを受けること、さらに神の御心に従い、苦しみを受けることが書かれています。

ですので、これらのことばを通して、教会のさばきが行われる日は、また、正しいクリスチャンが苦しみを受けたり、神の御心に従って、なお苦しみに会う日であることが分かるのです。そしてその苦しみはどこから来るのでしょうか？ それらの正しいクリスチャンへの迫害は、その背教の教会、クリスチャンから来るものが類推できるのです。聖書はその終末の日、神の家の兄弟間、親子間で訴えられ、死に渡されることを、たとえを通して語ります。以下のことばの通りです。

〔聖書箇所〕マタイの福音書10:21,22

10:21 兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に立ち逆らって、彼らを死なせま

す。

10:22 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

その背教の教会においては、キリストはペテン師、嘘つきであるとされます。そして、どこまでもキリストに忠実に従う人々は憎まれ、訴えられ、死に渡されます。キリストは拒絶され、代わりに反キリストが拝されるのです。

それは、かつての日の再現です。キリストをペテン師呼ばわりし、代わりに人殺し、バラバを受入れた神の民の背教の再現する日なのです。

〔聖書箇所〕マタイの福音書27:21,22

27:21 しかし、総督は彼らに答えて言った。「あなたがたは、ふたりのうちどちらを釈放してほしいのか。」彼らは言った。「バラバだ。」

27:22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはいっせいに言った。「十字架につけろ。」

このようにして、キリストを拒み、死に渡したエルサレムの町の人々は、のちにさばきに渡されました。ローマにより、滅ぼされたのです。そして同じことが終末の背教の教会において再現するでしょう。その日、背教の教会はキリストをペテン師呼ばわりし、どこまでも忠実にキリストに従おうとする人々を訴えるようになります。そしてその教会に関して、「**神の家からさばきが来る**」とテキストのみことばは語っているのです。正しくこれらのことを理解し、必要な終末の備えを行いましょ。



さばきは神の家から始まる

「御霊の実」を結ぶ E3

毎週の礼拝のメッセージで色々なことを教えていただいているのですが、先日は「御霊の実を結ぶ」ことの大切さを第一ペテロの手紙3章から学ばせていただき、それはまた、私たちが死後に受けるさばきの基準のひとつの大事な要素となるのでは？と思いましたが、お話をさせていただきたいと思います。すでに音声メッセージでご存知の方もいらっしゃると思いますが、しかし初めての方もおられると思いますので、よろしければお読みいただければと思います。以下のみことばから、エレミヤ牧師がメッセージされていました。

〔聖書箇所〕I ペテロの手紙3:3-5

3:3 あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、
3:4 むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。
3:5 むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちも、このように自分を飾って、夫に従ったのです。

これらの箇所において、あまり外面的なことばかりに力を入れずに内面的なことに力を注ぐことを言われています。つまり第一義的な意味合いとして、外観ばかりに気を使うのは良くないということを言っています。しかしこのことについて、たとえの意味合いもあるので、それも見てみたいと思います。まず、「外面」と「内面」があります。ここで、「金の飾り」ということばが出てきます。「金」は「信仰」のたとえなので、「金の飾り」とは「すごい信仰」のことを言われているのですが、しかしこのことは「外面」のことです。また、「髪を編む」ということばですが、このことばは原語の意味合いとして、キリストが十字架にかかった時の「いばらの冠」のことばに通じます。たとえば、キリストの苦しみを負っているとか、断食をしているとか、です。しかしそれも「外面」のことです。そして「金の飾り」も「髪を編む」ということばもいずれも「外面的」な事柄についてのことばです。たしかにそれらはすばらしいものかもしれませんが、でも、4節

にありますように、神の前に価値のあるものは違います。それに関して、ひとつは「霊」について言われています。柔和とか穏やかな霊にポイントがあります。これらのものは聖霊の働きを得ていくときに、朽ちることがありません。せっかくですので、「朽ちることのない」ということばについて見てみましょう。

〔聖書箇所〕I コリント人への手紙15:52

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

「朽ちないもの」とは「復活」のことを言われています。このことはつまり、「永遠の命」に関することです。そしてこれは先ほどの第一ペテロの手紙の「朽ちることのない」のことばと同じことを言われています。つまり「御霊の実」は、「永遠の命」に通じることがお分かりになると思います。ゆえにここでのポイントは、「御霊の実」を結んでいるかどうか、永遠の命を得るかどうか？に通じるということ言われているのです。そうです。「御霊の実」を結ぶことこそ、神の前に価値があるのです。以下、要点を述べます。

- ①神が大事にしていることと、人が注目することは違う。
- ②どういう霊に導かれているか？それが神の前に価値があること。
- ③神がさばき主なので、神が真に大事にしていることに心を向け、シフトしていく。

このように理解していくときに、「柔和な霊」＝「御霊の実を結んでいく」という結論となり、それは「復活の命」（永遠の命）に通じていく、と言えるのでしょうか。また、神の前に価値のあるものは、人にとっては大したことではないかもしれませんが、しかし神の前に価値のあるものに力を注いでいきたいと思えます。

「御霊の実」を結ぶ E3

以上のことをエレミヤ牧師が語られていたのですが、「うんうん、たしかにそうかもなあ」とうなずくばかりでした。そして反対に「御霊の実」を結ばせないパターン^①の結末に関しても述べていましたので、そのこともお話したいと思います。以下の箇所から、エレミヤ牧師が語られていたことです。

〔聖書箇所〕マルコの福音書4:26-29

4:26 また言われた。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、

4:27 夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。

4:28 地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がはいります。

4:29 実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです。」

ここでのポイントは「かま」を入れることです。このことは黙示録にも書いてあります。そしてこれは「携拳」のことを言われています。そのポイントとして、「苗」や「穂」は刈り取られず、「実」（御霊の実）が刈り取られます。ここでも、神が重要視しているのは「御霊の実」のみだということが理解できます。クリスチャン生活でどこにポイントを置くかが大事だということです。ですから「外側」ばかりを見ずに、「聖霊」によって歩むことに心を留めていきたいと思えます。そして「御霊の実」を結ばない人は刈り取られませんので、結ばせていくようにしていきたいと思えます。

周囲のクリスチャンがどのような視点や価値観で歩まれていらっしゃるかどうかはともかく、私個人としては、「ん？これってとても大事なことはないかな？」と思えました。かつては信仰を持っていれば、毎週礼拝に行っていれば、そして奉仕をしていれば、訓練をしていれば、何か少しでも賜物があれば、ほぼ間違いなく天国に入れる！なんていう思いが多少なりともあったのですが、でも、みことばやメッセージを通して、そうとも言えないのでは？と思えました。もちろん信仰も賜

物も奉仕も訓練も、どれもこれも素晴らしいものですし、全く無いよりかはあるほうがいいですし、そしてまた、これらのものは聖書においても一面奨励されているので大事なことはありますが・・・しかし天の御国に入る基準においては「御霊の実」を結ばせていくことにポイントがあるようですので、メッセージで語られていましたように、少しずつでもそういった方向へシフトしていかなければ、と思えました。皆さまはすでにご存知かと思いますが、「御霊の実」とは、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」です。

それこそエレミヤ牧師が語られていましたように、「御霊の実」を結ばせないというときに刈り取っていただけないので・・・そうすると恐らく天の御国ではなく、永遠の忌み（ハデスとか火の池とか地獄と呼ばれる場所）に、死後入ってしまう可能性がありますので、それだけは何が何でも回避しなければ！と思えました。そしてはじめに申し上げましたように、とても大事なことだと思えたので、ひとりでも多くの方にこのことをぜひ知っていただきたいと思ひまして、お話しさせていただきました。このようなポイントに関しましても、よろしければご理解いただけると幸いです。いつも大切なことを教えてくださり、語ってくださる神さまに栄光と誉れがありますように！



種を蒔く人

お知らせコーナー

●エレミヤの新刊「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」



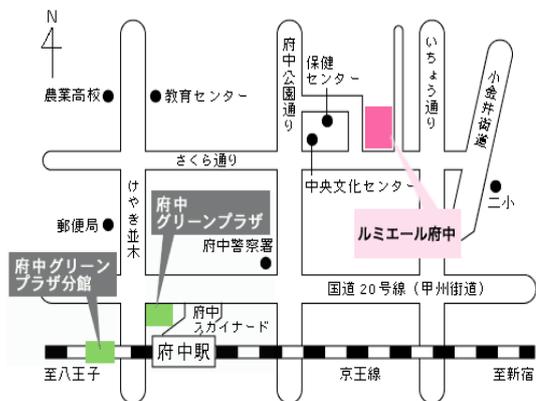
定価:¥1,500+消費税 ※注文を御希望の方は、以下へご連絡下さい。
警告の角笛出版 tel:042-364-2327 fax:020-4623-5255
mail:truth216@nifty.com

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日 午前 10:30-12:30
午後 14:00-16:00

場所:東京都京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館
(tel:042-360-3311)

1Fのエレベーター脇の部屋表示板で、
「レムナントキリスト教会」の部屋をご確認ください。
どなたでも来会歓迎、入場無料です。



礼拝場所のURL: http://www.fuchu-cpf.or.jp/green/access/map_02.html

★教会のHPもあります。

ご興味のある方は、“Yahoo! Japan”で、「府中 レムナントキリスト教会」で検索ください。

尚、レムナントキリスト教会はプロテスタントの教会です。ものみの塔や統一教会とは関係ありません。

☆クリスチャンの方におすすめのサイト:エレミヤの部屋

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/6810/>

☆クリスチャンになったばかりの方やノンクリスチャンの方におすすめのサイト:オリーブ&ミルトス

<http://remnantnotudoijimdo.com/>